月刊『光の泉』で人生を語られた黒田武志住職

株式会社日本教文社発行の月刊誌『光の泉』十二月号に黒田武志氏（横浜市港南区　曹洞宗善光寺住職）の記事が掲載された。この雑誌は、宗教法人生長の家本部の編集によるもので、黒田武志氏が登場したのは、広く各界で活躍中の著名人に、人生観、人生のターニングポイントをインタビューによって語ってもらう、〝じんせい拝見〟という欄。この欄にはこれまでに、科学者・糸川英夫氏、画家・横尾忠則氏、元巨人軍監督・川上哲治氏、元NHKアナウンサー・鈴木健二氏、歌手・三波春夫氏、作曲家・船村徹氏などが登場している。

じんせい拝見

宗派を超えて祈る
世界の平和　黒田武志さん

月刊宗教光明 ● Takeshi Kuroda

今回、一年のとりを飾る十二月号で黒田武志氏は、〝宗派を越えて祈る世界の平和〟と題して、ご自身の人生観を中心に、「海外留学僧派遣育英会」の活動内容と今後の抱負、また、越し方の数々のエピソードについても、一般読者にわかりやすく語られている。また、お話中の表情や、海外研修時の様子も写真で紹介。十一月の中旬に、約四十万部発行されたが、たいへん好評で反響が多く、善光寺の住所の問い合わせ等が光の泉編集室に殺到している。

『善光寺海外留学僧派遣育英会。黒田武志さんが、何年も温め続け実現させたこの制度は、宗派を問わず、国籍、男女を問わず、広く門戸を開き、世界平和に貢献する人材を次々に育てている。〝宗祖を通して釈尊に還れ〟を信念とし、常にグローバルな視野をもって未来を見つめる黒田さんに、その生き方の土台となった数々の貴重な人生体験をうかがった』

（光の泉十二月号〝じんせい拝見〟のリード文より）

善光寺護持会会長・越石周平氏四男 越石哲永氏ご結婚

平成四年九月十四日、成寿山善光寺護持会会長・越石周平氏のご子息、哲永氏が、善光寺住職・黒田武志氏夫妻の媒酌によって結婚式をあげられた。場所は（横浜プリンスホテル）

越石哲永氏は昭和三十六年九月三日生まれ。大学在学中は、ニューヨークへ建築研修のため留学。卒業後は善光寺留学僧派遣育英会の派遣により、アメリカ・ニューヨークのグレイストン（社会福祉団体）で三年間勉強し、平成二年にはニューヨークで〝K&Mア

ソシエーション〟を設立された。帰国後は国内で貿易会社を設立。

すばらしい情熱と才能を持つ、この若きリーダーに嫁がれたのは、安嶋洋子さん（現在は越石洋子さん）。中学時代からテニスを始め、高校時代は関東大会、インターハイにも出場、また、社会人となり銀行に勤めてからも、神奈川県の代表として全国大会や国体にも出場するほどの、爽やかで快活なスポーツウーマンである。

ちなみに哲永氏は、越石周平氏の四男にあたられるが、長男・光政氏、次男・行政氏、三男・浩司氏とすべて黒田武志氏夫妻が仲人を務めている。それぞれがみな幸せに暮らしているのを見て、哲永氏も安心して、洋子さんとともに温かく明るい家庭を築かれていくことだろう。

どうぞ末永くお幸せに…

遠藤翠水氏、日中の友好深める書道展を開催

善光寺の書道教室でも指導にあたられている遠藤翠水氏（全日本新芸書道会会長・日中書画連盟会長・国際芸術協会常任理事）が、このたび中国・上海美術館書道展を開かれた。

〟上海・横浜友好書画交流展〟と題されたこの書道展は、遠藤氏が、姉妹都市でもある横浜と上海との友好関係を、書道を通して深めていきたいと発案したもの。また、「書道が生まれた中国で展示会を開いてみたい」というのが、遠藤氏の長年の願いでもあった。当日は、日中の筆達者による作品百六十七点が、約六百平方メートルのフロアに展示。国境を越えて、観る人の心をふるわせた。

遠藤氏が書の道に入られたのは、故郷（福島）の獣医さんから学んだことがきっかけだった。書くほどに、書の奥の深さに魅かれていつしかプロの道へ。「書を通じて豊かな人生を」という氏の信条が、書画交流展ではよく伝わって、展示会後の揮毫会では、さらに親睦が深まった。

拝するがごとく撮る駒沢探道氏の写真展開催される

善光寺海外留学僧派遣育英会参与でもある、駒沢探道氏（日本写真家協会会員・本名、駒沢晃氏）が、昨秋、朝日ギャラリー（有楽町マリオン11階）で、「駒沢探道写真展—佛姿写伝・鎌倉〝妙道〟」を開かれた。

京都の大佛師、故松久朋琳氏との運命的な出会いを経て、仏像写真はお堂で拝するがごとく撮るべきだと気づいた駒沢氏。氏の写真展では、作品を前に思わず手を合わす人がいるというのも、きっとそこに、み仏の奥にある愛そのものが写し出されているのを感じるからだろう。

駒沢氏は昭和十五年長野市生まれ。昭和五十一年、文芸春秋の特派員として一年間渡米、帰国後、銀座、横浜、大阪、札幌等で個展を多数開く。写真集に『風車まわれ—水子地蔵に祈る』（春秋社）、『佛姿写伝—鎌倉』（神奈川新聞社）など、エッセイ集に『一隅を照らす玲瓏の人々』（日本教文社）などがある。なお、エッセイ集には、善光寺住職、黒田武志氏のことも紹介されている。

人、皆、仏の子。藤本幸邦氏の教育精神に黒田住職感動

社会福祉法人　円福会の養護施設・円福寺愛育園（長野市）を、去る十一月、善光寺の黒田武志氏が訪ねた。

同園は、理事長である元円福寺住職・藤本幸邦氏が昭和二十三年に設立したもの。戦争が残した傷跡の一つであった戦災孤児の窮状に心を痛めた藤本氏は、昭和二十二年に、自ら三名の孤児を上野駅からつれて来て、全国の寺院に一寺院一孤児運動を提唱。昭和二十三年、児童福祉法施行とともに寺の庫院をそのまま活用し、児童たちの親がわり、家庭がわりの役割を果たす養護施設・園福寺愛育園をスタートさせたのである。以来、藤本氏のもとを巣立っていった児童たちは、三百五十名にのぼる。

愛育園の精神は、〝人　皆　仏の子〟。児童の生きていく基本的な権利を守り、幼くして負った心の傷をいやしつつ、健全な心身の発達を願う藤本氏のすばらしい活動に、黒田氏はたいへん感動を受けられたという。

藤本氏は現在、世界法民太陽学園の学園長も兼任、世界一家を唱導し、アジア難民救援、途上国学童支援のSABA運動も展開中。著書に『おっしゃんが証明した「実行の哲学」』（株ぱんたか）他がある。

心もそろう

はきものをそろえると心もそろう
心がそろうとはきものもそろう
ぬぐときにそろえておくと
はくときに心がみだれない
だれかがみだしておいたら

だまってそろえておいてあげよう
そうすればきっと
世界中の
人の心もそろうでしょう
（円福寺愛育園　心のノートより）

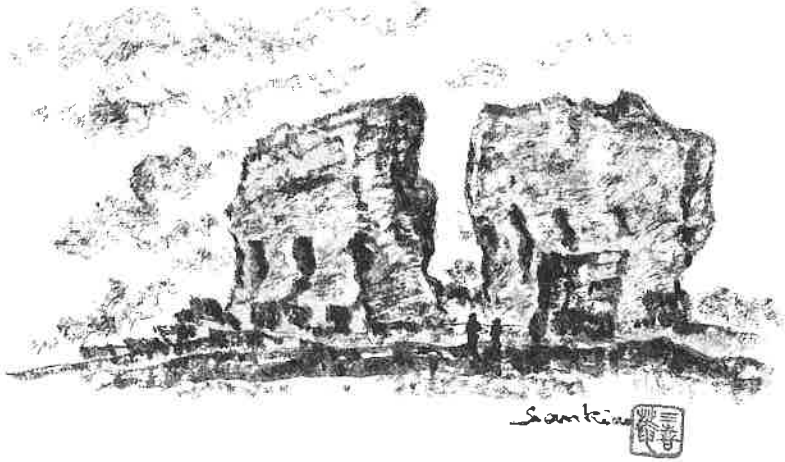
田中智誠氏、隠元禅師の研究論文を発表

第一法規出版株式会社発行の月刊誌『月刊・文化財』の第三四七号に、田中智誠氏が、〝隠元禅師生誕四〇〇年と黄檗のいま〟と題する研究論文を発表された。

中では、黄檗開山隠元隆琦禅師（大光普照国師。一五九二―一六七三）の生い立ち、中国における事蹟、渡米と開創の過程、また、伽藍の寺宝、慈愍忌についても詳しく述べられている。隠元禅師ゆかりの重要文化財の写真が多く掲載され、読みごたえのある内容。非常に熱心に研究を進められていることがうかがえた。

東隆眞氏の〝タイ王国仏教つれづれ〟中外日報に四回連載

駒沢女子短期大学副学長・東隆眞氏（善光寺留学僧派遣育英会役員）の執筆原稿、「タイ王国仏教つれづれ―瞑想のワット・パクナムに詣でて」が、平成四年十月二十日から二十六日までの中外日報で四回にわたり掲載された。

タイでは仏教は、国教に近い扱い。国民の約九十五パーセントは仏教徒で、国王も保護

に力を入れているということ。また、ワット（寺院の意）、パクナム（河のほとりの意）、など、たとえば女子学生が読んだとしてもわかるように、やさしくていねいに解説をしてくれながら書いてくれており、バンコクのワット・パクナムの日本人僧の関係も、興味深く読むことができる。最後にまとめとして、もっとよくタイ仏教を知れば、お互いがお互いの立場を理解し、尊重しつつ、仏陀釈尊を仰ぐことによって、等しく喜びを覚えるはずである。国際化、情報化のなかで、互いに理解し協力することによって新しい仏教のあり方を展望することが、世界平和への貢献につながっていく—ということを教えてくれている、すばらしい記事である。